

アントレプレナーシップ養成を企図した 実践型社会連携教育科目の指導実践と学修成果

Practice and Learning Outcomes of Social Cooperation Education Courses Aimed at
Fostering Entrepreneurship

吉川 幸 ・ 鈴木 真理子

Miyuki YOSHIKAWA, Mariko SUZUKI

岡山大学全学教育・学生支援機構

教育研究紀要

第5号 2020年12月

アントレプレナーシップ養成を企図した実践型社会連携教育科目の指導実践と学修成果

吉川 幸¹・鈴木 真理子²

Practice and Learning Outcomes of Social Cooperation Education Courses Aimed
at Fostering Entrepreneurship

Miyuki YOSHIKAWA, Mariko SUZUKI

要旨

2018年12月より「SiEED（シード）」という名称でスタートした岡山大学起業家精神養成プログラムは、2020年3月末日を以て寄附講座という形を終了した。全学教育・学生支援機構基幹教育センター実践教育部門では、その方針を引き継ぐ形でアントレプレナーシップ（起業家精神）養成を試みる科目を開講し、「プロジェクト・ゼロ（実践編）」と名付けた。

本稿では同名称で開講した2科目の授業について、授業実践と履修者の意識と行動の変容に関する考察を報告する。授業では起業経験のある協力者を学外から招き、課題解決型学習（PBL）の題材を提供していただいた。授業内では複数のグループを編成して課題解決のための企画立案に取り組み、企画立案プロセスは実務経験のある教員が指導した。自己評価アンケートの結果、学生には実行力、課題解決力、ストレスコントロール力が備わったという意識変容が見られた。

キーワード

実践知、アントレプレナーシップ、課題解決型学習、学修成果、社会人基礎力

1. 開講の経緯

岡山大学起業家精神養成プログラム（SiEED）は、株式会社ストライプインターナショナルの寄附講座として、起業家精神（アントレプレナーシップ Entrepreneurship）や組織内から改革する精神（イントラプレナーシップ Intrapreneurship）を深い学びの中で養成し、知識・技能だけでなく行動力と発信力を兼ね備えた高度実践人および起業家マインドを持つ人材の育成を目的として2018年12月に開始し、2019年度に4科目を実施した。履修登録者の総数はのべ390名であった（表1）。2020年3月末日を以て惜しまれながら終了したが、多くの学生に刺激を与えた。その後、コーディネーターとしてこれら科目を担当していた鈴木が全学教育・学生支援機構実践教育部門に異動し、SiEEDの主旨を継承した科目の開講可

¹ 岡山大学全学教育・学生支援機構実践教育部門兼 Center for Teaching Excellence 准教授

² 岡山大学全学教育・学生支援機構実践教育部門特任助教

能性を検討した結果、民間企業での豊富な事業開発経験を持つ吉川との共同企画により、アントレプレナーシップ養成科目として「プロジェクト・ゼロ（実践編）」を開講することとした。実践教育部門では実践型社会連携教育科目を開講しているため、社会課題を対象として課題解決を図る際の事業企画の観点に起業家的視点を加味することは比較的考えやすいためである。

表 1 2019 年度 SiEED 開講科目一覧³

科目名	開講時期	履修人数
アントレプレナーシップ入門-グローバル市場における最先端の起業家精神 (SiEED 入門)	第 1 学期月曜 7・8 限	127 名
革新的起業と先端技術-世界を変えるイノベーション	第 1 学期火曜 7・8 限	90 名
アントレプレナーの戦略的思考	第 2 学期木曜 7・8 限	85 名
アントレプレナーの事業開発方法	第 2 学期金曜 7・8 限	88 名

2. 本研究の問い

本研究では、課題解決型学習によって現実的な社会課題を扱う科目を履修した学生たちにどのような意識と行動の変容が見られたかを考察する。授業者 2 名は、社会課題に向き合うコンピテンシーの変化は、経済産業省が 2006 年に提唱した「社会人基礎力」⁴として定義された「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として現れるとの仮説を持ち、社会人基礎力に基づいた項目で測定することとした。社会人基礎力とは「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力から成ると定義されており、3 つの能力は合計 12 の能力要素に細分化されている。本研究では意識変容の状況を把握するため、12 の能力要素を具体的に詳述して設問化した自己評価アンケート⁵を用いた。

同名称の 2 科目は基本的な授業の流れは同様だが、履修者の属性（学年や大学生生活経験）や担当教員の指導方法は異なる。本稿では、2 科目の授業内容と学生の自己評価アンケート結果を報告し、教員による観察結果を加味して考察する。

³ 2019 年度第 1 学期は 2019 年 4 月 8 日～6 月 10 日、同第 2 学期は 6 月 13 日～8 月 8 日である。

⁴ 社会人基礎力の項目と能力要素は次の通りである。

前に踏み出す力： 主体性、働きかけ力、実行力

考え抜く力： 課題発見力、計画力、創造力

チームで働く力： 発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力

⁵ 自己評価アンケートは鈴木が 2018 年度に作成したものを本研究でも使用した。

3. 科目の概要

「プロジェクト・ゼロ（実践編）」は同名称の2科目を同時開講し、重複履修は不可とした（表2）。開講曜日は1年生が受講しやすい木曜日と、2年生が受講しやすい金曜日とした。実践的な指導を行うために履修可能人数は各25名定員とし、希望者多数の場合は抽選を実施して履修者を決定した。最終的な履修登録者数は、木曜クラスが14名、金曜クラスが8名であった。木曜クラスは14名中13名が1年生で、この科目が大学入学後初めて教室で学ぶ科目であるという学生が大半であった。また、金曜クラスには1年生はおらず、8名中5名が2年生となった。両クラスとも履修者が所属する学部は様々であった。

表2 2020年度「プロジェクト・ゼロ（実践編）」⁶

呼称	科目名	授業者	開講時期	履修人数
木曜クラス	プロジェクト・ゼロ （実践編）	吉川 幸	第3学期木曜7・8限	14名
金曜クラス	プロジェクト・ゼロ （実践編）	鈴木 真理子	第3学期金曜5・6限	8名

履修者の学部・学年は次の通りである（表3、表4）。

表3 木曜クラス履修者（単位：人）

学部／学年	1年	2年	3年	4年	合計
文	1				1
経済	6				6
医	1				1
工	3				3
環境理工			1		1
農	1				1
GDP ⁷	1				1
合計	13		1		14

表4 金曜クラス履修者（単位：人）

学部／学年	1年	2年	3年	4年	合計
教育		1			1
経済			1	1	2

⁶ 2020年度第3学期は2020年10月1日～12月1日である。

⁷ グローバル・ディスカバリー・プログラム

薬			1		1
工		1			1
環境理工		1			1
GDP		2			2
合計		5	2	1	8

4. 科目の状況

4-1. 木曜クラスの概要

4-1-1. シラバス

本科目では、アントレプレナーシップ養成を主眼に置き、大学での学修成果を生かし具体的な事業企画を発案するプロセスを経験する。実務家のゲストから問題提起があり、学生は実務経験のある教員の指導のもと、グループで発案、企画の具体化、プレゼンテーションを行う。グループワークの割合が多く、学生は積極的な発言と傾聴を求められる。

木曜クラスでは、新型コロナウイルス感染拡大状況下で示された「新しい生活様式」や、急速にオンライン活用が進んだ現状を踏まえて『オンラインで実現できるインターンシッププログラム』の開発に挑戦する。事業目的を実現するために制約条件にとらわれることなく発想を広げ企画案を組み立てることで、社会課題解決に挑む。

学習目的は「アントレプレナーシップ養成のため、大学での学修成果を生かし具体的な事業企画を発案するプロセスを経験する」、到達目標は「1. 事業開発の標準的なプロセスを理解し、課題設定、課題解決、事業企画立案を実際に経験する。2. プロジェクトチームでのグループワークを通して協働の意義を理解し、コミュニケーション能力を高め、サーバンントリーダーシップを身につける。3. 企業活動に対する社会状況の影響について考察する」の3点とし、初回授業で学生たちとシラバスを読み合わせ、確認をした。

4-1-2. 協力団体と選定理由

協力団体として、企業、NPO、まちづくり協議会、自治体などの多様な主体とともに企業や地域の新たな仕事づくりや課題解決に取り組むNPO 法人 エリア・イノベーション⁸の藤井智晴代表に依頼した。同法人が2018年度から倉敷市実践型インターンシップ⁹の現地コーディネートを行い、その報告会に参加した吉川と面識があったことに加え、岡山県笠岡諸島での「六島全島民ユースチューバー化計画¹⁰」など独自性のあるインターンシップを運営する

⁸ NPO 法人エリア・イノベーション <https://area-i.org/>

⁹ 倉敷市実践型インターンシップ <https://kurashiki.area-i.org/>

¹⁰ 六島全島民ユースチューバー化計画 <https://mushima-kosodate.jimdofree.com/>

など、豊富な実績があることが理由である。旧来の価値観を打破するような姿勢が、アントレプレナーシップ養成を主眼とする課題解決型学習に参考になることが期待された。

4-1-3. 授業計画

対面授業が実施可能な時期であったため、履修者数に対してかなり余裕のある広さの教室を使用して授業を行うこととした。グループワークを行うため、学生たちにはソーシャルディスタンスを確保するように毎回注意を促した。学生たちはマスク着用、入室時の手指消毒などに注意して授業に参加した。以下は木曜クラスの授業計画である（表 5）。

表 5 木曜クラス授業計画

講	授業日	内容	場所
1	10月1日（木）	オリエンテーション	教室
2	10月8日（木）	協力団体代表によるレクチャー	教室
3	10月15日（木）	プロジェクトワーク（1） チーム編成、アイディアブレスト	教室
4	10月22日（木）	プロジェクトワーク（2） アイディア整理、企画骨子検討	教室
5	10月29日（木）	プロジェクトワーク（3）企画立案	教室
6	11月5日（木）	中間発表会	教室
7	11月12日（木）	プロジェクトワーク（4）仕上げ	教室
8	11月26日（木）	最終企画発表会	教室

4-1-4. 授業の進行

第 1 講では全 8 回の授業の見通しを立てるためのオリエンテーションと、互いに初対面となる学生同士がこれから安心して学び合いができるよう、学びの共同体を作るための活動を行った。インターンシップを扱う科目なので、教室はさながら共に「働く場」とあるという意識を持たせるために、『株式会社プロジェクト・ゼロ』で共に働く仲間との『ワーキング・コミュニティ』を作る」という想定を示したうえで、自己紹介をした。企業内で複数のプロジェクトを同時進行させることは日常である。学生たちには、互いに競い合う関係ではなく、良い企画を作るために互いに刺激し合える関係であると考えてほしいため、このような形で科目をスタートさせた。「科目自体がインターンシップのようだった」という感想がのちに学生から聞かれた。

第 2 講では協力団体による講義と質疑応答を行った。講義では、60 分間のプレゼンテーションの中で団体の説明、活動内容の他、動画でインターンシップ学生の声や受入企業の狙いなどが紹介された。この回の学生たちのミニレポートでは、「インターンシップについて

の理解を得た」という声や、「インターンシップを受け入れる側の視点を考えたことがなかったのが新鮮だった」という声が聞かれた。履修者の大半が1年生なので、動画に補佐された説明は大変分かりやすかったようである。質疑応答はおおいに活発であった。

第3講はチーム編成を行った。まず、2回目となる自己紹介ワークをした。授業開始時の学生たちは互いを知り合えるほどにはまだ交流できていない。第2講の質疑応答は確かに盛り上がったが、説明者との1対1の応答がほとんどで、学生同士でアイデアを交換し合う関係はまだできていない。グループでのプロジェクトを進めるために、このタイミングで2回目の自己紹介ワークを行って互いの関心事を知り、関係性を深めてほしいと考えたためである。ここでは「ウインドウズ」というワークを行った¹¹。A4判の紙を縦2本、横2本の直線を書いて9つのマス(複数の窓=ウインドウズ)を作るアナログなワークである。中央のマスに自分の呼び名を書き、周囲のマスには「オンラインインターンシップでやってみたいこと」を8つ書くように指示した。全員が記入し終えた頃合いで、全員で大きな円形になるように席移動し、名前を名乗ってから説明するようにしたため、クラスメイトの呼び名もここで確認できたのではないかと思う。青木(2018)が提案する「ウインドウズ」ワークは以上の形だが、教員はさらに、他の学生の発表を聴きながら「もっと知りたいこと」と「自分の考えと組み合わせたら何か生み出せそうなこと」を付箋に書くように指示した。

欠席者を除く13人の学生がいたので、全体で100枚以上の付箋が書けた。これを模造紙に並べてKJ法を行い、自分たちはどんなオンラインインターンシップをしたいのかを全員で話し合った。教員はKJ法の簡単な説明と、3グループ作ってほしいという指示をし、学生たちに話し合いを任せた。その結果、イベント、観光、特産品の3チームが出来ることになった。話し合いの過程でどのようなことがしたいかの意見交換もできた。

チームメンバーを決めるにあたっては、学生たちが一斉に希望するチーム名を指差す方法で決めた。人数の多寡は学生たちが自主的に調整した。第3講は関係性づくりとプロジェクトイメージが同時に出来た重要な回であった。

第4講と第5講はグループごとのプロジェクト活動を行った。第4講の冒頭で教員から企画の立て方を紹介した。アウトプットに必ず含むべき要素として、対象者、活動内容、期待効果の3点を明らかにするよう求める一方、コストや工程は考え方のみ示し、含めても含めなくても構わないとした。これはプロジェクト活動を行う時間が実質4時間しかないためである。学生たちは話し合いをしながら持参したコンピュータで調べものをしたり、模造紙と付箋を使ってブレインストーミングを行うなどして、それぞれのテーマをオンラインインターンシップで実現するための企画案を練った。

なお、第4講と第5講では事後課題による意識付けを強化した。第4講の事後課題では、授業時間内に考えた企画案について、自分が考える「自慢できる点」を思いつく限り書くと

¹¹ 青木(2018) pp. 38-39

いう課題を課した。第5講の授業開始時には全員の「自慢できる点」を匿名化して共有し、第5講の授業時間内にグループで企画を完成させるよう指示した。そのうえで第5講の事後課題では、自分のグループの「粗探し」をできるだけ書くという課題を課した。教員は授業中に巡視し、グループ課題を前向きに組み立て、かつ実現可能性を批判的思考で見るときに助言を行い、学生たちが事後課題で熟考できるように支援した。

第6講は中間発表会である。グループによっては第5講の後に自主的に活動したものもあったようである。第6講の冒頭15分間はグループ内での確認時間とし、その後、3グループが順番に発表した。発表形態は自由としたが、どのグループも5枚程度のプレゼンテーションを用意し、投影しながら発表した。教員は、発表を聴く際には7.5センチ角の付箋にマーカーで質問やコメントを1枚につき1件書くように指示した。また、宛先と自分の名前も書くように指示した。すべての発表終了後、付箋を交換しながら対話する時間を設けた。この活動は、発表内容が聴衆にどのように理解されるかを可視化するワークである。発表したことがすべて聴衆に伝わらないこと、伝わったことのうち理解されていることはさらに少ないことを実感させたいと考えたためである。学生たちは受け取った付箋をグループで見ながら聴衆の反応を確認した。事後課題では自分の感想と、自分以外の2グループのいずれかについての感想を書くように指示した。

第7講では、第6講の事後課題を全員分匿名化して共有してから開始した。学生たちは共有された事後課題を見て、発表内容がどの程度理解されたかをグループごとに話し合い、その後、プロジェクトを完成させるための活動を行った。

第8講は成果発表会を行った。3名の審査員を迎え、社会人としての視点から厳しめの質問をしてもらい、ルーブリックを用いて審査した。あるグループはプレゼンテーションファイルが途中から投影できなくなるトラブルに見舞われたが、教員から投影無しで発表を続けるように指示され、説明を続けた。中間発表会の時と同様に、発表を聴く際には付箋にコメントを書くように指示した。宛先はグループでも個人でもよいものとし、自分の名前も書くように指示した。このワークは「付箋レター」と名付け、授業のクロージングとして学生同士が付箋を渡し合い、互いの健闘を称え合った。

事業企画を立案するという形を取ったが、授業内で行った活動や事後課題は、自グループのことだけを考えるものばかりではない。全3グループは競い合う関係であると同時に、「株式会社プロジェクト・ゼロ」の仲間として高め合う関係でもある、ということを理解してほしいと願っていたため、互いの企画を磨き合うために意見を惜しみなく出す活動を多く取り入れた。学生たちはよく切磋琢磨し、大きな達成感を感じてゴールした。授業評価アンケートでの学生の自己評価は5.0満点中の4.9、授業満足度は5.0となった。

4-2. 金曜クラスの概要

4-2-1. シラバス

授業の概要、学習内容は、木曜クラスとほぼ共通とした。ただし、金曜クラスは特に、スタートアップ企業の人材育成を念頭に置いたアントレプレナーシップの養成を狙うこととし、到達目標に違いを設けた。木曜クラスの到達目標2は、「(奉仕や支援を通じて、周囲から信頼を得て、主体的に協力してもらえる状況を作り出す) サーバントリーダーシップを身につける」であったが、スタートアップ企業人材を意識し「(個人がそれぞれリーダーシップを発揮して自立性をもって取り組む) シェアド・リーダーシップを身につける」を採用した。さらに、資金調達や顧客獲得のために必要となる発信力「聴き手がどのような情報を求めているかを理解して、納得させるようなプレゼンテーションをすることができる」も到達目標に加えた。

取り組む社会課題は、岡山県の特産物である桃を題材に、空間軸や時間軸を行き来しながらウェル・ビーイングな世界の在り方を模索し、高い視座で新規事業を考案する経験が持てるよう、『果物を通して、ウェル・ビーイングな未来を創り出すために出来ることは何か』とした。

4-2-2. 協力団体と選定理由

金曜クラスでは、協力団体として「農業生産法人 果樂株式会社¹²⁾」を選定した。法人代表の土居栄太郎氏は、岡山県内桃農家を家業として継承し、2016年に農業の第6次産業化をはかり法人化、2018年に岡山イノベーションコンテストでグランプリを受賞した¹³⁾起業家でもある。実際に起業を経験した人物から直接話が聴ける機会は、本科目が掲げる「アントレプレナーシップ養成」に大きな効果があると考えられる。そして鈴木が顧問を務めるアントレプレナーシップ養成を目的とした学生団体「-Ceed¹⁴⁾」の学生らとも親交があり、彼らから推薦があったことも選考理由の一つである。

4-2-3. 授業計画

チームでのディスカッションを主軸とする本科目のような課題解決型学習は、オンラインよりも対面による授業形態の方が望ましい。3学期は、岡山大学の方針として対面授業も可能になったため、主に教室で授業を実施した。

以下に、授業および課外での活動の日程を示す(表6)。

表6 金曜クラス授業計画

講	授業日	内容	場所
---	-----	----	----

¹²⁾ 果樂株式会社 <https://karakuinc.com/>

¹³⁾ 岡山イノベーションコンテスト2018 <https://www.oi-project.jp/arch/arch2018/>

¹⁴⁾ 岡山大学-Ceed <https://www.ceed-okayama.org/>

1	10月2日(金)	オリエンテーション	教室
2	10月9日(金)	協力企業経営者によるレクチャー	教室
3	10月16日(金)	プレゼンテーションと チームビルディング	教室
4	10月23日(金)	ビジネスモデルをつくる	教室
5	10月30日(金)	協力企業経営者へのヒアリング	教室、zoom
課外	10月31日(土)	(任意) 協力企業での農業体験	圃場@倉敷市
6	11月6日(金)	中間発表会	教室
7	11月13日(金)	メンタリング	教室
課外	11月21日(土)	(任意) 協力企業での農業体験	圃場@倉敷市
課外	希望日	チーム別メンタリング	-Ceed オフィス
8	11月27日(金)	最終企画発表会	教室

金曜クラスの協力企業は農業法人である。農業の経験がない大学生が、農家の課題を理解することは難しい。現場に立ち、実際の圃場で農業を体験することで見えてくるものがあるだろうということで、土居代表が10月31日と11月21日に農業体験を受け入れてくださった。

4-2-4. 授業の進行

第1講ではオリエンテーション、および次週の土居代表によるレクチャーに向けて質問のスキルを養成する活動を行った。まず、講義の目的、方針を理解するためのオリエンテーションを実施し、学生に授業の全体像をイメージさせた。その後、「受講後に到達したい自分」を脳裏に描き、クラス全体の前で言語化して発表させた。受講目的を明確に認識させることが狙いである。受講者8名のうち、3名が「周囲との繋がりや協調性がある」、2名が「プレゼン力がある」、その他「起業ノウハウをマスター」「面白い自分」「思考力のある自分」を目指していた。さらに互いの理解を深めるため、相手にとって未知のモノ(自分)を既知のモノ(果物)に例えて表現するアナロジー思考での自己紹介を取り入れた。この自己紹介は印象に残ったようで、振り返りレポートの中にも「何かに例えての自己紹介は、学部や身の上話を聞くよりも、よほどその人の為人が理解できたように思えた」との感想があった。続いて「果物との出会いの中で一番の幸せな思い出」について個々に発表させ、聴衆側には、出来るだけ多くの事実関係、感情、価値観を探る質問をするよう働きかけをした。このワークは、次週に向けて、質問のスキル向上を狙ったものである。振り返りレポートには「そこから来るかと思う視点の質問が多くあり、自分の思考の幅を広げられているように感じた」という声があった。

第2講では、土居代表による講義と質疑応答を行った。講義の中で創業の経緯、イノベー

ションにかける思い、今後の事業展開、課題の背景、学生に望むこと等が紹介された。学生は、『果物を通して、ウェル・ビーイングな未来を創り出すために出来ることは何か』という課題に込めた土居代表の思いや価値観、岡山の桃の強みや課題などについて、多角的に質問していった。振り返りレポートには『『パッションを持って、自分が今できることを考え、実行することが大切だ！』『今やっていることは必ずいつか役に立つ』という土居氏の言葉が印象に残った』と書かれていた。授業を通し、協力してくれる社会人からこのように生き方も学ぶことができることも社会連携教育の醍醐味であろう。

第3講では、プレゼンテーションとチームビルディングを行った。ある学生が「話し方や服、価値観や自分のアイデアなど、このクラスでは自分色が出れば出るほど輝いて見える」と評した通り、個性的な人物が集まったクラスである。8人とは言え、どうチーム編成するか悩んだが、スタートアップを模し各々のプレゼンを観て自分の直感に従ってペアを組むという形をとった。教員から「スタートアップの際、1人でビジネスを大きくするのは非常に難易度が高く、共同創業者がいた方が成功確率は高い。共同創業者を探す場合、相手と自分が異なる能力を持ち補い合うように組むということは容易に想像できるが、実はそれよりも共通する価値観や志を持っている仲間を見つけることがより重要」と説明をした。その上で、クラス内で各々の価値観を共有した後、自分の志と情熱を伝えるプレゼンテーションを行った。プレゼン後、学生たちはとてもスムーズに2人1組の4チームを結成した。

第4講では、ビジネスモデルをつくる活動を行った。1人20以上のビジネスアイデアを持ち寄り、その中からチームで3つを選ぶ。選んだ3つのアイデアを、スタートアップの事業創出の際によく利用される「リーンキャンパス」というフレームワークに落とし込み、ビジネスモデルとして視覚化した。「アイデアの出し方」や「リーンキャンパスの書き方」については、授業アシスタントの-Ceed学生が説明した。この学生は、自ら起業を目指し岡山イノベーションスクールを経て、各種ビジネスプランコンテストなどで資金調達を進めており、「自分が学んできた新ビジネス創出スキルを教える側として経験したことは、自らの知識や思考を強化する効果的な場となった」と語っている。PBLの授業は、教員の負荷が高くなりがちであるが、SA/TA制度などを利用し学生・教員間での半教半学の間を構築すれば、全員にとって利のある“三方良し”の効果的な授業となることを実感した。

第5講では、再び土居代表にヒアリングをする機会を持った。学生達は質問を通し、第4講で作成した「リーンキャンパス」に手を加えていった。振り返りレポートには「質問できるということは、しっかりと傾聴することはもとより、しっかり準備をしてその分野におけるバックグラウンドの知識を蓄えられてこそできると思った。準備することでただ聞くだけでなく、疑問が湧き質問に繋がるのだと思う。新しい学びとなった。」という感想があった。ヒアリングの機会が調査分析を進めるよい促進剤になったことが伺える。

第6講は、木曜クラスと同様、中間発表会である。この回は、学生同士の質疑応答やプレゼン相互評価を主な活動とし、全チームが互いのビジネスプランをブラッシュアップする

場とした。スタートアップでは特に、机上での検討に時間をかけるよりも、多様なステークホルダーにアイデアを語り、多角的な視点で事業案をブラッシュアップしていく手法をとることが多い。この中間発表会では、前述した授業アシスタントの先輩学生に、ビジネスコンテスト等の審査員からよく出るような質問を依頼した。また、木曜クラスの協力団体であるNPO法人 エリア・イノベーションの藤井代表にも、指導・助言を依頼し、意図的に社会人の視点で厳しいコメントを頂いた。以下は、振り返りレポートにあった学生の思いである。「正直に言って(プレゼン)は酷いものだった。何一つ褒められたものじゃない。更に始末が悪いのは、その原因が明確であるにもかかわらずこの結果に陥ったことだ。準備不足。その他何もない。皆同じ条件でできる限りのことを尽くしている。けれど自分はどうだったのだろうか。忙しいことを言い訳に逃げただけではないのか。そう思った。できない理由を探すことはあまりに容易なことだ。けれどできない理由を握りつぶすことはあまりに難しい。けれど失敗から学ばない限り成長はない。寧ろ今回の失敗は最大限の伸びしろともとれるはずだ。今回の醜い怠慢な準備を改め直し、成長の糧にすること。ただそれだけを忘れないようにする。誠実とは言行が一致している状態を指す。それに自らをもっていくためにまず行動。口よりも手を動かすことが失敗を克服する第一歩である。最終発表の時、後悔の念に駆られるか否かは自分次第だ。」

第7講は、第6講とは別の-Ceed先輩学生と教員により各チームへのメンタリングを行った。驚いたことに、全4チームが前回の厳しいフィードバックを受けて、ビジネスプランを大きく変更していた。授業外での各種調査、アンケート実施、協力企業での農業体験、チームでのオンラインディスカッションなどを行い、多くの時間とエネルギーをビジネスプラン創出に費やしたことが分かった。授業内では各チーム約20分ずつのメンタリングを実施したが、どのチームも納得できるプランまで至らず、成果発表会までの間に、チーム毎に再度1時間のメンタリングを実施することとなった。反省点としては、課外での学修時間が多くなり過ぎたことである。週当たりの平均課外学修時間は約3時間で設計している旨を第1講のオリエンテーション時に説明していたが、最終アンケートで尋ねたところ、1人平均週4.1時間という結果となった。学生からのコメントにも「時間外での取り組みがかなり多い講義ではあるので、講義のコマ数や時間に余裕のある学生でないと負担になり、意欲低下につながりかねないので、シラバス等に予め掲載する必要があるかもしれない」とあった。

最終第8講は、成果発表会を行った。4名の審査員を迎え、中間発表会と同様の評価シートを用いて審査した。土居代表からは「とても響いた。できることなら、今後、皆さんとプランの実現に向けて進みたい」と話があった。中間発表と成果発表の両方に参加した藤井氏からは「中間発表に比べて格段に提案の質が上がった。ターゲットが絞り込まれ、データを活用し、より社会が見えてきたと感じた。」とコメント頂いた。以下は、発表後の学生の感想である。「中間発表での酷評を経た最終週では見違えるような発表をしている学生が多く、クラス内で高めあえた結果の成功だと思った。ビジネス案のプレゼンはつまるところ相手

を共感させるところにある。そして動いてもらうことにある。これを教えてもらった時に知識の断片が点から線に繋がり、プレゼンが青いなりにも満足できるものになった。この先も非常にいきてくと確信している。」

授業終了時のアンケートで、第1講で発表した「受講後に到達したい自分」になったか問うたところ、2名が「到達できた」、残り6名が「一部到達できた」と答えた。「ある程度できたのかなとは思いながらも、まだまだこれから成長していきたいと感じた」「やればやるほど、もっと勉強が必要だと気づいた」という感想に、この授業が肯定的な自己認識と自ら学びに向かう力の獲得機会になったと感じている。

この項の纏めとして、大学の授業評価アンケートに書かれた意見を紹介する。「これからの時代を生きていく上で必要な力を身につけられる講義である。受動的な体系の講義に横槍を入れるかのような講義であり、能動的に参加できた。自分の将来のことを考え、主体的に行動できる人材はきっとこの講義に満足できるだろうことは間違いない。」

5. 学生の意識と行動の変容

5-1. 自己評価アンケートに現れた変化

社会連携型授業に参加した学生が自覚している変化がどのようなものかを調査するため、両クラスとも第1週と第8週に自己評価アンケートを課した。全回答者のうち、事前・事後ともに回答した学生の回答のみを抽出した結果、集まった回答数は木曜クラスが11(回収率79%)、金曜クラスが8(回収率100%)、合計19である。実施に当たっては第1週と第8週の宿題として課し、学生はMoodleに授業後3日以内にアクセスして回答した。

自己評価アンケートの設問は72あり、選択肢は「あてはまる」と「あてはまらない」の2択である。集計では「あてはまる」と回答したものを1、「あてはまらない」と回答したものを0として、各設問の平均値を集計した。回答結果を表7に示す。事前平均は各クラスの事前調査の平均値、事後平均は同事後調査の平均値を示している。回答数が少ないため全設問の平均値はここでは議論しない。設問ごとの結果においても1名分の回答の影響度合いが大きくなるという点では同様であるが、設問間の比較を行う意味合いから、集計結果を下記に述べる。

木曜クラスで最も大きな変化が見られたのは、設問17「(実行力) 失敗を恐れずに、とにかくやってみようとする果敢さをもって、取り組むことができる」、設問41「(発信力) 事例や客観的なデータを用いて、論理的にわかりやすく伝えることができる」、設問67「(ストレスコントロール力) ちょっとしたことで動揺したり落ち込んだりするが、あまり長くは引きずらず、次に進むことができる」で、それぞれ0.45上昇した。いずれの設問も事前平均が木曜クラスの中では比較的低かったが、第4週の「自慢大会」と第5週の「粗探し」などで企画を吟味するプロセスを可視化したことが奏功したというコメントが多く見られたことから、学修の安心感が学びの推進力になるのではないかと思われる。次いで上昇したの

は、設問 9「(働きかけ力) 人に働きかける時、相手を尊重しながら、言うべきことは言える」、設問 24「(課題発見力) 事実が複雑に絡み合っている場合でも、情報を客観的に分類、分析し、因果関係をわかりやすく整理することができる」、設問 27「(計画力) 経験のあることや具体的にイメージできることについては、周囲との関係も考慮して、実現の可能性の高い計画・手順を立てることができる」、設問 34「(創造力) アイデアに行き詰った状況でも、様々な角度から柔軟に発想し、その場の議論を活性化することができる」、設問 36「(創造力) 物事を考える時には、出来るだけ制約条件や既存の考えにとらわれないよう心掛けることができる」、設問 38「(発信力) 説明する時には、まず結論を述べ、後から根拠、例、経緯などを加えている」、設問 65「(規律性) おかしいと思う事や間違っていると感ずることには、自分の行動を律するだけでなく、周囲に働きかけて全体の行動修正をすることができる」、設問 69「(ストレスコントロール力) ストレスやプレッシャーがかかるような状況でも、落ち着いてやるべきことに集中することができる」の 8 設問で、それぞれ 0.36 上昇した。

金曜クラスで最も大きな変化が見られたのは設問 18「(実行力) 障害や困難があっても、強い意志を持ち、粘り強くやり遂げることができる」で、0.50 上昇した。今回、中間発表会で厳しいフィードバックを受けたことや最終発表会の準備が期末テストの時期と重なったこと、課題が抽象的で捉えづらかったこと等が障害や困難であったと考えられるが、それらを乗り越え、ぎりぎりまで何度も何度も提案内容をブラッシュアップさせる経験を積んだことがこの結果につながったと考えられる。次いで、設問 10「(働きかけ力) チームのメンバー同士が相互支援できたり、情報を共有し合う環境を創り出すことができる」、設問 12「(実行力) 何かを行う時、目的を明確にしている」、設問 20「(課題発見力) 自分なりに情報を集めて、整理することができる」、設問 24「(課題発見力) 事実が複雑に絡み合っている場合でも、情報を客観的に分類、分析し、因果関係をわかりやすく整理することができる」、設問 47「(傾聴力) 内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる」、設問 48「(傾聴力) 質問のスキルを用いて、相手がまだ意識していない考えを言語化する支援をすることができる」、設問 60「(状況把握力) 活動を振り返り、改善点を次に生かすことで成果を継続的に高めていくことができる」、設問 69「(ストレスコントロール力) ストレスやプレッシャーがかかるような状況でも、落ち着いてやるべきことに集中することができる」、設問 72「(ストレスコントロール力) ストレスの原因に自ら働きかけたり、自分なりの方法で気持ちを落ち着けることができ、速やかな解消に努めることができる」の 9 設問で、いずれも 0.38 上昇した。

表 7-1 設問ごとの回答結果（1）

		木曜クラス			金曜クラス		
		事前平均	事後平均	変化量	事前平均	事後平均	変化量
主体性	1 人からの指示があれば、行動することができる	0.82	0.82	0.00	0.75	0.88	0.13
	2 覚えた知識やスキルは、すぐに使ってみようと考えている	0.73	1.00	0.27	0.75	0.88	0.13
	3 任されたことは、自分の責任で判断しながら自発的に取り組むことができる	0.82	0.82	0.00	0.63	0.88	0.25
	4 自分への期待を意識し、良いやり方を追求しながら行動に移すことができる	0.73	0.91	0.18	0.75	0.75	0.00
	5 困難なことでも、責任感を持ち、他者に流されずに行動できる	0.36	0.55	0.18	1.00	0.88	-0.13
前に踏み出す力	6 求められれば、他者に手を貸すことができる	1.00	0.91	-0.09	0.88	1.00	0.13
	7 ディスカッションでは、議論の目的に沿って意見を述べることが心掛けている	0.64	0.82	0.18	0.75	0.88	0.13
	8 周囲の状況に気を配り、必要としている人の手助けをすることができる	0.91	0.73	-0.18	1.00	0.75	-0.25
	9 人に働きかける時、相手を尊重しながら、言うべきことは言える	0.64	1.00	0.36	0.88	0.88	0.00
	10 チームのメンバー同士が相互支援できたり、情報を共有し合う環境を創り出すことができる	0.91	0.91	0.00	0.38	0.75	0.38
	11 目的を達成するために、協力することの必然性（意義、理由、内容など）をわかりやすく伝え、周囲の人を巻き込むことができる	0.73	0.64	-0.09	0.50	0.50	0.00
	12 何かを行う時、目的を明確にしている	0.91	1.00	0.09	0.38	0.75	0.38
実行力	13 一度始めたことは最後まで頑張ろうと努力することができる	0.64	0.82	0.18	0.75	0.75	0.00
	14 自ら目的・目標を設定し、達成に向かって取り組み続けることができる	0.73	0.91	0.18	1.00	0.75	-0.25
	15 計画通り実行できているか、途中で確認しながら進めることができる	0.82	0.73	-0.09	0.50	0.38	-0.13
	16 計画通りに進んでいないとき、どうしたら目的を果たせるか、考えることができる	0.91	0.82	-0.09	0.88	0.75	-0.13
	17 失敗を恐れずに、とにかくやってみようとする果敢さをもって、取り組むことができる	0.36	0.82	0.45	0.75	0.75	0.00
	18 障害や困難があっても、強い意志を持ち、粘り強くやり遂げることができる	0.64	0.82	0.18	0.50	1.00	0.50
	課題発見力	19 与えられた情報を元に、現状を把握することができる	0.82	0.73	-0.09	0.75	0.88
20 自分なりに情報を集めて、整理することができる		0.73	1.00	0.27	0.63	1.00	0.38
21 思い込みや憶測を出来るだけ入れずに情報を収集し、客観的に分析し、問題に対して複数の仮説を立てることができる		0.27	0.55	0.27	0.50	0.50	0.00
22 課題に対して、どんな観点が必要かを検討し、適切に情報を収集することができる		0.73	0.82	0.09	0.75	0.50	-0.25
23 課題を明らかにするために他者の意見を積極的に求め、合理的な判断の上で、関係者の心情をくみ取った判断ができる		0.73	0.91	0.18	0.63	0.75	0.13
24 事実が複雑に絡み合っている場合でも、情報を客観的に分類、分析し、因果関係をわかりやすく整理することができる		0.36	0.73	0.36	0.38	0.75	0.38
考え抜く力		25 経験のあることや具体的にイメージできることについては、計画・手順を自分なりに立てることができる	0.82	0.82	0.00	0.88	0.88
	26 計画は「○○を××する」と詳細項目まで分解して書き出すことができる	0.64	0.82	0.18	0.63	0.75	0.13
	27 経験のあることや具体的にイメージできることについては、周囲との関係も考慮して、実現の可能性の高い計画・手順を立てることができる	0.55	0.91	0.36	0.63	0.75	0.13
	28 事前にリスクを想定し、計画の実現性を吟味することができる	0.55	0.73	0.18	0.50	0.50	0.00
	29 初めてのことや抽象度が高いことについても、いつまでに何をやるのかの具体的な行動計画を立てることができる	0.64	0.73	0.09	0.63	0.75	0.13
	30 自分やチームにとって挑戦的な目標を設定し、メンバーの分担を適切に行うことができる	0.55	0.82	0.27	0.38	0.50	0.13
	創造力	31 課題解決のために必要な専門知識を進んで学習することができる	0.55	0.82	0.27	0.50	0.63
32 複数のものを結び付けて新しい発想をすることができる		0.82	0.91	0.09	0.75	0.63	-0.13
33 従来の常識や発想を転換し、新しいアイデアや解決策を創り出すことができる		0.45	0.55	0.09	0.88	0.88	0.00
34 アイデアに行き詰った状況でも、様々な角度から柔軟に発想し、その場の議論を活性化することができる		0.36	0.73	0.36	0.63	0.75	0.13
35 成功イメージを意識しながら、常に新しいものを生み出すためのヒントを探している		0.64	0.82	0.18	0.50	0.75	0.25
36 物事を考える時には、出来るだけ制約条件や既存の考えにとらわれないよう心掛けることができる		0.18	0.55	0.36	0.63	0.88	0.25

表 7-2 設問ごとの回答結果 (2)

		木曜クラス			金曜クラス			
		事前平均	事後平均	変化量	事前平均	事後平均	変化量	
発信力	37	自信のあることについては、自分の意見を述べることができる	1.00	0.91	-0.09	0.75	0.88	0.13
	38	説明する時には、まず結論を述べ、後から根拠、例、経緯などを加えている	0.55	0.91	0.36	0.50	0.75	0.25
	39	話の内容によって、面談、電話、メール、文書など手段を使い分けることができる	0.82	0.73	-0.09	0.63	0.63	0.00
	40	意見が対立したり、立場が上の人に対しても、相手に配慮しながら、自分の意見をはっきりと述べるができる	0.55	0.82	0.27	0.75	0.88	0.13
	41	事例や客観的なデータを用いて、論理的にわかりやすく伝えることができる	0.36	0.82	0.45	0.50	0.38	-0.13
	42	相手の理解を得られない場合であっても、自分の意見を論理的にわかりやすく伝え、粘り強く主張することができる	0.55	0.73	0.18	0.63	0.88	0.25
	43	聴き手がどのような情報を求めているかを理解して、納得させるようなプレゼンテーションをすることができる	0.55	0.73	0.18	0.50	0.63	0.13
傾聴力	44	相手の話を素直な心で聴くことができる	1.00	0.91	-0.09	0.75	1.00	0.25
	45	相槌やアイコンタクト等のスキルにより、心を傾けて聴いていることを相手に示すことができる	1.00	0.82	-0.18	0.88	1.00	0.13
	46	復唱のスキルにより、理解していることを相手に示すことができる	0.73	0.82	0.09	0.50	0.75	0.25
	47	内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる	0.73	0.91	0.18	0.63	1.00	0.38
	48	質問のスキルを用いて、相手がまだ意識していない考えを言語化する支援をすることができる	0.36	0.64	0.27	0.25	0.63	0.38
柔軟性	49	意見が対立した場合でも、互いの意見を可視化し、さらに創造的な結論に導くことができる	0.64	0.82	0.18	0.63	0.75	0.13
	50	自分と異なる意見や価値観に出会った場合、戸惑いながらも、相手の背景や事情を理解しようと努めることができる	1.00	0.91	-0.09	0.88	0.88	0.00
	51	自分と異なる意見や価値観を柔軟に受け入れ、自分の考え方の幅を広げよう心掛けている	1.00	1.00	0.00	0.88	0.88	0.00
	52	想定外の状況でも、柔軟に行動を修正しながら計画を進めることができる	0.55	0.73	0.18	0.75	0.75	0.00
	53	自分と異なる意見や価値観を柔軟に受け入れ、自分の考え方の幅を広げながら、積極的に人間関係を広げていくことができる	0.73	1.00	0.27	0.75	0.88	0.13
チームで働く力	54	先行きを予見し、必要に応じて早めに全体の動きを軌道修正することができる	0.45	0.55	0.09	0.50	0.63	0.13
	55	チームに迷惑をかけないよう、自分の担当の仕事をきちんと遂行することができる	1.00	0.91	-0.09	0.88	0.75	-0.13
	56	自分にできること、他人ができることを判断して、行動することができる	1.00	1.00	0.00	0.50	0.75	0.25
	57	自分に割り当てられたことが周囲にどんな影響を及ぼすかを考え、最良の結果が出るように工夫して課題に取り組むことができる	0.91	0.91	0.00	0.75	0.88	0.13
	58	チーム全体の進捗状況を確認しながら、メンバーの状況(忙しさ、人間関係など)に配慮して、良い方向へ向かうよう行動することができる	0.91	0.82	-0.09	0.63	0.75	0.13
	59	成果を上げるために、自分に割り当てられたことに留まらず、チームやクラスの中で果たすべき役割を自ら考え、周囲と協力して課題に取り組むことができる	0.64	0.91	0.27	0.50	0.63	0.13
状況把握力	60	活動を振り返り、改善点を次に生かすことで成果を継続的に高めていくことができる	0.73	1.00	0.27	0.63	1.00	0.38
	61	期限を守ることができる	0.91	0.64	-0.27	0.75	0.50	-0.25
	62	相手に迷惑をかけないよう、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解している	1.00	0.91	-0.09	0.88	0.88	0.00
	63	相手に迷惑をかけたとき、適切な行動をとることができる	1.00	0.91	-0.09	0.88	0.88	0.00
	64	おかしいと思う事や間違っていると感じることは、他人の目を気にすることなく、進んで規範となるような行動を取ることができる	0.82	0.91	0.09	0.50	0.63	0.13
	65	おかしいと思う事や間違っていると感じることは、自分の行動を律するだけでなく、周囲に働きかけて全体の行動修正をすることができる	0.55	0.91	0.36	0.63	0.63	0.00
規律性	66	規律や礼儀が特に求められる場面では、社会人として適切にふるまうことができる	0.82	0.82	0.00	0.63	0.75	0.13
	67	ちょっとしたことで動揺したり落ち込んだりするが、あまり長くは引きずらず、次に進むことができる	0.36	0.82	0.45	0.75	0.88	0.13
	68	人間関係など身近な問題が発生した時には、落ち着いて自分なりに対処しようとする	0.91	0.91	0.00	0.88	1.00	0.13
	69	ストレスやプレッシャーがかかるような状況でも、落ち着いてやるべきことに集中することができる	0.36	0.73	0.36	0.38	0.75	0.38
	70	自分がストレスを感じやすい状況を知っており、対処方法について考えている	0.64	0.73	0.09	0.63	0.88	0.25
	71	ストレスやプレッシャーがかかる場面でも、客観的に、物事の優先順位を考えて行動することができる	0.64	0.91	0.27	0.50	0.75	0.25
ストレスコントロール力	72	ストレスの原因に自ら働きかけたり、自分なりの方法で気持ちを落ち着けることができ、速やかな解消に努めることができる	0.64	0.91	0.27	0.63	1.00	0.38

5-2. 学生の記述に見られる変容

学生が自覚している変化を示す記述を、授業後の課題から抽出する。

5-2-1. 前に踏み出す力

- 企画発案やディスカッション、プレゼンテーションなど、自分にとってできれば避けたいような内容のあふれる授業で、最初はあまり気が進まなかった。しかし最終的には、履修前より成長できたと自信を持って言えるような経験をする事ができた。一つは上記に挙げたような、自分の苦手なことから逃げずに進んで挑戦したことだ。特にプレゼンテーションやディスカッションは社会に出てからも必要なスキルなので、一年生の頃からしっかりした経験ができてよかった。
- 私は人前で話すことがあまり得意ではないので、積極的に話すことができませんでした。しかし、周りの人は積極的に、自分なりに一生懸命意見を言っている姿を見て、自分も受動的でなく能動的にみんなのように発言しなければならないと思い、中間発表会の質問の場で積極的に自分の意見を述べました。自分の中で、その時が一番成長したなと感じました。
- 自分のプレゼン力の低さを思い知る回だった。裏を返すと、先に失敗出来て良かったとも感じる。主な反省点は次の三つ。「資料が見にくい」「おしゃべりに寄りすぎて抑揚が無い」「早口」である。1つ目は、経験不足から作りなれていないため、そこがウィークポイントとして強く表れた。また、スライドの内容以上に話してしまい、混乱させてしまった可能性がある。社会人になるとプレゼン機会が多くなるため、しっかりと改善していきたい。2つ目と3つ目は、自身の癖であるから、意図して変えていかないとはいけない。一方、客観視したとき、良かった点の一つだけある。それは分かりやすさだ。心がけていた「伝わるように話す」ということが生きたと感じる。
- 前よりも成長したと感じたことは、プレゼンすること自体に緊張するのではなく、うまく伝えられるかどうかに関心して取り組んでいたことである。もちろんプレゼン自体にも緊張したが、必要な程度の緊張だったと思う。それよりも絶対に話すのを忘れたくないポイントを忘れずに言うことや、焦らずわかりやすく言うことに注力できたと思う。これから必要だと思ったのは聞き手の反応を見てコミュニケーションを取りながら話すことなので、今回はそれに注意して取り組みたい。

5-2-2. 考え抜く力

- 結果は1番ではなかったものの、発表自体をやり切れたという達成感、そしてどんな形であれ、完成形にできたことが何よりうれしく感じた。回を増すごとに楽しさも増し、授業が終わることが非常に寂しく感じている。
- 企業の社長やインターンシップのスペシャリストといった大人の方に自分たちの企画を実際に評価してもらうということは、非常にいい経験になった。受けた指摘はどれも

鋭く、シビアなものばかりで、企画発案は本当に大変な作業であるということを実感した。

- リーンキャンパスに書かれたコメントを見て少し考えさせられた。ヒアリングの中で、もう一度考えさせられた。一つ、クライアントの期待に本当に添えているだろうか。一つ、実現可能だろうか。一つ、新規ビジネスと呼べるだろうか。自分のアイディアに酔うだけで本質を見失っているのではないだろうか。そんな声がどこからともなく聞こえてくるようだった。そのための仲間がいて、チームなのだからもう一度精査し直す必要がある。今回のヒアリングで改めて確認できたこともある。やはり岡山の桃は岡山の桃としての価値があり、それを売り出すことで目指すところに手が届くのだろうと。それを望んでいるのだろうと。だからもう一度計画を練り直す。
- プレゼンについてはまずまずの出来だったと感じたが、そもそもの企画にぐらつきがあることを自覚した中間発表だった。最も後悔している部分は調査不足だ。時間が足りない中で重視すべきだったのは、プレゼン資料の派手さやプレゼンの練習よりも、調査と検討であった。その部分を質疑で突かれてしまい、失敗を自覚した。学ぶこともたくさんあったため、成長の肥やしとしていきたい。そもそも命題というか、「果物を通してウェルビーイング」を勘違いして考えていた部分があり、見失っていた点が多々あった。企画の規模感、実際の実現性、ターゲット選定は正しいのか、土居さんが何を望んでいらっしゃるのか。これらすべてに対して考えが足りていなかった。改めて二人で検討していく中で、これら一つずつ確かなものにしていきたい。場合によっては企画を白紙に戻し、可能な限り現実的で、土居さんの心を動かし、課題に応えたものとなるようにしたい。
- パズルのピース自体は概ねそろった。だがしかしそのパズルの中核を担う一ピースが欠落している。アイスクャンディーが棒の周りにアイスがついて形作られているように中核のコアがなければどんなに優れたアイディアの欠片もバラバラに零れ落ちてしまう。だからこそコアとなる中核を見つけ上げなければいけない。今の課題はそこにあり、そのピースをはめられればきっと物語は完成に近づくのであろう。ゴールの見えなかった手探りの状態から抜け出せるような感覚と共に、ビジネスの企画立案は大学の研究室で行う基礎研究に似ているとふと感じた。手探りの状態で試行錯誤を重ねながら答えのない間に、誰かのためのアイディアを創造せんとする点はまさに、どんな利益になるかも分からないが、社会を変えるものを生み出せんとする理系の基礎研究のそれと同じだと思った。

5-2-3. チームで働く力

- 何度も何度も悩んで話し合いを続けていくうちに、納得できる案が出せた時には、あきらめずに真剣に取り組むことで生まれるものがあると学びました。第一回目の授業で

は、授業を受けている人のほとんどが初対面で、顔も名前も分からず、緊張していましたが、難しい課題に挑戦していく中でチームワークが生まれ、全員が心強い仲間になった感じがしています。

- 私は審査員の方々の質問には一つも答えることができませんでした。審査員の方々の質問はとても厳しくこたえているチームの仲間をすごいなと純粋に尊敬しました。
- 自分よりはるかに優れた人たちに出会えたことも嬉しく思います。同じチームでも頭の回転であったり、考えの柔軟性であったり、仲間からもとても多くのことを学ぶことができました。この授業を通して自分の成長をとっても感じることができました。
- 普段、私は、授業やグループワークで積極的に話すタイプではなく、むしろ個人ワークが好きである。自分（又は他人）のアイデアを他人（又は自分）がつぶしてしまうこともあると思うし、グループのメンバー同士うまくコミュニケーションが取れないことがあるからだ（幸いなことに、この授業ではそのような経験はない）。私はさほど自分に自信はないが、自分の持っているアイデアや考え方、やっていることが好きなので、自分の思い描いているものを実現して、他人に認められた時、本当に嬉しい。今までは個人ワークを「自分のアイデアを守ってくれる安全な空間」と考えていたし、他人と協力するよりも個人ワークが自分には合っているのだろう、と思っていた。だが、この授業で、グループワークを重ねていくうちに、自分に足りないものは「相手に自分のアイデアを伝える力」だと気づかされた。自分のアイデアを他人と共有することで、アイデアを向上させることができたり、欠点に気付かされることが多くある。誰かのアイデアを選び1つのものを創り上げるのではなく、お互いに足りない部分/気付いていない部分を補っていくのだと気づかされた。

6. 考察

実践型社会連携教育科目では社会と密接に関わる課題を扱うが、授業でどのように課題を分析し、思考を深めるかという点に関しては、科目の独自性に委ねられてきた。本研究では2名の教員がそれぞれの考える最適な手法で授業を進めながら、履修者の社会人基礎力を示す指標に変容が見られるかを検証しようとしたものである。履修者数が多くないために定量的な検証を行うには限界があるが、自己評価アンケートの結果数値を参照しつつ、学生たちが記述したのを見ると、いくつかの考察を得ることができる。

6-1. 自ら学びに向かう力

活動の目的やねらいを理解し納得すれば、細かな指示を出さずとも、向かうべき方向を自ら見定め前進する力を発揮する。両クラスとも教員は学生の自主性を尊重し、ナビゲーターとしての役割に徹した。例を挙げると、木曜クラスでは学生同士の話し合いの糸口になる課題を課して、互いの意見を認め合い、自発的な議論になるように援助した。金曜クラスでは

学生が提出する事後課題に丁寧にフィードバックすることで学修のモチベーションを高めるように努めた。金曜クラスの学生の一人が事後課題でのリフレクション活動について「自分の思いを吐き出せる、安心できる場所」と評したように、安心して学べる環境下で学生たちは持てる力を発揮することができる。また、「時には意見に詰まることもあり苦しい時間を過ごすこともあったが、それも今思えば良い経験だったなと思う」というように、成長を客観視して認めることで、次への学びに向かう意欲が高まった学生もいる。

6-2. 共に学び合う力

多くの学生が共に学んだクラスメイトへの感謝の念を述べた。グループワークでは時に他人の努力にただ乗りするフリーライダーへの対応が懸念されることがあるが、両クラスともそのような学生は全く見られなかった。木曜クラスでは第4週の「自慢大会」と第5週の「粗探し」で、自グループだけでなく他グループについても任意で意見を言えるようにし、学びの材料を提供し合った。リアルな意見には説得力があり、入手した意見をグループ内で検討した。金曜クラスではグループ内の協力に加えて、先輩学生や社会人の助言も多く得られ、その姿勢に見習うところも多かった様子である。前述した「自ら学びに向かう力」が十二分に発揮される場においては、相乗効果で「共に学び合う力」も高まったことがうかがえる。

「誰かと協力し合って何か一つのものを作り上げることの楽しさを知りました。チームで活動するという事は、必ず自分の意見が通るとは限りません。自分の意見を通したい気持ちもありましたが、ぐっところえて、他人の意見を聞いて自分の意見をもう一度練り直して発言する力がついたように思います」というような声は多くの学生から聞かれ、自身の成長にもつながったことがうかがえる。チームだからこそ、より客観的に、そして責任感を持って、取り組むことができ、「楽しい」だけではない達成感の共有ができるのも、チームの利点である。

6-3. 行動に移す力

具体的なビジネスプランを検討するにあたり、対象顧客の属性や考え方、期待効果を中心に様々な視点から仮説を立て、問い直す作業を繰り返した。その中で新たな視点と課題が生まれた。また、毎回の事後課題で学修行動を振り返り、できた点とできなかった点を客観視するプロセスで、新たな気づきと計画に繋がった。この経験を通して、企画職の仕事に就くことを希望するようになった学生もいる。

7. 今後の課題

岡山大学での実践型社会連携教育は、学生を実際の社会課題の現場と関わりながら学ぶという点において画期的であるが、同時に大人数の学生を指導することが困難であるとい

う課題がある。本科目においても履修者数定員を何名にするかという事前の検討をし、各クラス 25 名であれば指導可能であるとの見通しを持って開講した。実際の履修者数はこれを大幅に下回ったため、きめ細かな指導ができたと考えているが、可能であれば 25 名程度のクラスサイズでさらに検証し、実践型社会連携教育科目の履修可能人数を増やしていきたいと考えている。

また、今年度は本科目以外にもアントレプレナーシップ教育関連科目を開講し、合計 5 科目を展開しているが、科目群としてのカリキュラムツリーを整えるには至っていない¹⁵。昨年度開講した SiEED プログラムの 4 科目も同様の課題があった。解決策として、実践型社会連携教育科目全体などある程度大きくくりの科目群でのカリキュラムツリー化を提案したい。今後、大学評価に起業家教育プログラムの有無やその充実度等が含まれるようになれば、アントレプレナーシップ教育に関する科目群は必要性を増すと考えられる。高等教育機関での起業家マインドの養成を一つの方向性として、社会と教育の接点を増やすための教育プログラム開発は継続、拡大する必要がある。

参考文献

青木将幸. (2018). 『リラックスと集中を一瞬でつくるアイスブレイク ベスト 50』. ほんの森出版

H19 年度版 経済産業省. 『社会人基礎力育成・評価のためのリファレンスブック』

金沢工業大学. 『KIT インターンシップガイドブック』

経済産業省編. (2010). 『社会人基礎力 育成の手引き』

学校法人河合塾、株式会社リアセック. 『PROG の強化書』 ver. 4.1

山崎 紅. (2012). 『求められる人材になるための社会人基礎力講座』. 日経 BP 社

田所 雅之. (2017). 『起業の科学 スタートアップサイエンス』. 日経 BP 社

¹⁵ 2020 年度の 5 科目は、本稿で述べた「プロジェクト・ゼロ (実践編)」2 科目の他、「SDGs 時代のキャリア形成」、「SDGs 実践チームビルディング ～シェアド・リーダーシップを鍛えよう」、「プロジェクト・ゼロ (マインドセット編)」である。